マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
郵便番号 154
世田谷区野沢3—11—3
電話 東京（424）4300
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　浮田信家

会員章（バッジ）

昭和五十四年二月六日

慰霊祭・総会

北から西から南から、遠くからでも一目でそれとわかるなつかしい姿、姿が靖国神社めざして集ってきました。

南十字星のバッジを輝やかせた全国のお仲間達は二百名を超え、参集所はさながらマーシャルデーになりました。役員の手馴れた受付を済ませるのももどかしく、挨拶を交す者、つもる話をする者、写真を交換する者もあります。同じ境遇の者同志のつき合いには理屈も説明も要りません。同じ島で戦死と知っただけ、同じバッジをつけているというだけで充分なのです。

やがて午前十時。手水に身心を浄めお祓をうけて昇殿参拝です。御本殿で英霊との対話を終えて退下し、定期総会が開かれました。予定では総会と報告会は宝物遺品館で行うことになっておりましたが、雨模様の中、遺品館には暖房のないことから参集所を使ってよいとのお取計いを頂きました。

総会は浮田会長の御挨拶に始まり、佐藤副会長が議長になって進められました。昨年中の会務の概要を浮田会長から、決算（別表）を井上常任幹事から、監査の結果を末広監事から夫々報告され、一括承認いたしました。

次に本年度の会務計画を浮田会長から、予算（別表）を井上常任幹事から提案されて、これまた満場一致可決しました。ついで、役員全員任期満了による改選については次の通り決まりました。常任幹事に、岡野智津子さんと木下満子さん。監事に秋山正清さん。幹事に井上賀雄さん、佐竹エスさん、大高吉郎さん、昼間楽平さんが夫々就任され、その他は全員再任となりました。

以上で総会を終り、引きつづいて昨年八月のクェゼリン島慰霊の報告会になりました。

目　次

昭和五十四年二月六日の
慰霊祭・総会……1
お便りの中から…福島市　富田　みつ……2
慰霊祭に寄せて
……東京都　昼間志津子……2
〝環礁〟編集委員について……2
マーシャル諸島のお客様来日の御予定……3
53年度決算・54年度予算……3
政府派遣ブラウン環礁戦歿者
遺骨調査団に参加報告
……会　長　浮田　信家……4
政府派遣慰霊団
ギルバート班に参加して
……青　森　塚原　ハナ……8
ルオットとマロエラップと
—二五二空の戦闘（一）—
……京都…平林　和夫……9
寄付者芳名……10
事務局だより……12
戦記シリーズ……31〜34

↗〔写真〕芦ノ湖レストセンター前

佐藤副会長が8ミリと現地での録音を使って報告されましたが、感激が蘇ってか声も乱れがちでした。

未だ見たことのない人にとってクェゼリンは夢の島ですが、慰霊団に参加した人には今尚強烈な感動の残っているなつかしい思い出の島です。

十六年前にこの会が出来た頃にはとても予想できなかったことが実現して、座ったままで島の状況がはっきりとわかるようになった経過を思うとき、浮田会長の御努力、御苦心の程が改めて思い出されます。

直会旅行

今年の直会旅行は、岡野常任幹事と荒木常任幹事が世話役を引受けて、企画、下見、準備を進めて下さいました。折よく朝からの雨も上って青空が広がってきました。一行八〇名は、報告会が終った直後二台のバスに分乗して出発しました。

東名高速を富士に向って一路西へ、厚木インターから小田原、熱海を経て伊東温泉〝ホテル聚楽〟に着きました。直会には岡野幹事御苦心の盛沢山の福引が用意され、ユーモア溢れる司会に楽しい一と時をすごしました。

翌七日もお天気は上々、中伊豆バイパスを西海岸にぬけて、伊豆農協江間支所の「特産いちご園」に着きました。ハウスの中には真紅に熟れたいちごが待っていました。「果物屋さんのいちごと全然味が違う」「いちごがこんなにうまいものとは知らなかった」「朝の御飯を控えてくればよかった」等々。〈この企画はヒットしたようです〉

車窓から〝草燃える〟伊豆の山野を眺める間に、韮山の反射炉に着いて見学し、箱根山に登って〝芦の湖レストセンター〟で中食の時間になりました。湖面の向うの富士山を見乍らのアツイ鍋は格別でした。

小田原駅で関西方面の人が降り、軽くなったせいか、東京駅に着いたのは予定の六時少し前でした。

……直会旅行は会員の要望によって四十五年から毎年欠かさず行われ、今年で十回になりました。コース、費用、運営等についての御意見をお聞かせ頂きとう存じます。

お便りの中から

福島市　富田みつ

……今日、直会旅行の記念写真と旅行の決算書、それとおつりまでもお送り頂き有難く頂戴致しました。会長様始め役員の皆様方には御多忙の中を会員のために御つくしなされておりますこと、心から感謝申し上げます。靖国神社での感激、そして楽しかった直会旅行のおいしいいちご。参加して本当によかったと思います。来年を楽しみに、元気に頑張ります。……

慰霊祭に寄せて

昼間　志津子

雨足を気にしながら参集所へと急ぐ。会場は既に受付準備が済んで、会員の皆様のおいでをお待ちする。

やがて雨の中お年よりの方が、足もとを気にしながら見えられる。思わず会場のガラス戸を開けて「お疲れさま、さあどうぞ」と手をさしのべる。「お世話さまになります」と曲った腰を猶も低くし、にっこりとなさる。あちらでは「又お会い出来ましたね」とお互の無事を喜び合い手を取って一年間の空白を埋めようとでもするように心せわしく話に花を咲かせる。

お互いを労り合いながらやっと目的地に着いたという感じの方達、昨年の直会旅行の記念写真を手渡そうとして顔は解っていても名前が解らない、と探し廻る方、旅行の度重なる毎に良き友良き理解者を得て人々の輪は広がってゆきます。

こんな光景を見て、何はともあれこの会の意義の一端を目の前に描き出された気が致しました。

私の身内には戦死した者がおりません。私の主人の兄が、ウオッゼ島で戦死致しました関係で本会のお手伝いをさせて頂いており、戦死という事に対し敬虔な気持を持っております。しかしその身ではありませんので、思いは至らない事と存じます。

でも朝な夕な遺影に手を合わせております主人の後姿を見、加えて慰霊祭の当日、雨の中を一所懸命おいでになる方々、参拝も終り総会後の墓参フィルム映写となり、そっと目頭をおさえる方……私にとりまして今回は今までになく感銘を受け微力乍ら少しでもお役に立つ事が出来たら、と心を新たに致しました。

〝環礁〟編集委員について

本会の事業の中で最も大事な会誌〝環礁〟の編集、発行は創刊以来浮田会長が自らやって下さいました。他の役員は申訳けないと思い乍ら会長に甘えて今日まで過ごしてきました。

二月二十四日の役員会で、浮田会長が海軍の復員史と法規類集の執筆、編さんをしなければならなくなったことを聞き、本号以後〝環礁〟の編集は、会長の指導、監督のもとに編集委員が行うことになりました。

今期の委員には、佐藤宗丕、井上賀雄、高林芳夫、荒木常子、昼間志津子の五名が指名されました。

今更言うまでもなく会誌は会の生命であり、会員の心と心を結ぶ唯一つの共有財産であります。会員皆様の御支援によってよりよい会誌を作ってゆきたいと思いますので、旧に倍し御協力の程をお願いいたします。（さ）

マーシャル諸島のお客様
来日の御予定

六月七日、マジュロの山村　要様から浮田会長宛に大要次のようなお便りが着きました。

「……マーシャル諸島の日系人四十二名が、八月十二日にマジュロを立って日本へ観光にまいります。私は戦後二度日本に行きましたが、観光で行ったのではないので何もわかりません。滞在中の宿泊、観光コース等について御指導頂きたいのです。滞在日数は十八日間の予定です……」

私達は、遺族会を結成して以来、昭和四十二年の現地調査のときもその後二回の慰霊団派遣のときも、現地の方々には大変お世話になっております。又日常いろいろの情報を頂いており、御恩返しの方法に苦慮していた所でしたが、この際でき得る限りの御世話をしたいと考えます。

とりあえず宿所を九段会館に予約し、観光日程の検討をしております。

会員の中で、訪日団の旅行日程その他を知りたい方は、至急本会まで御通知下さい。詳細決定次第お知らせ致します。

（山村様のお便りには団員の氏名は書いてありませんが、私共がお会いした方々が大部分ではないかと予想されます）

第15期決算報告書（自53. 1. 1　至53. 12. 31）
マーシャル方面遺族会

1. 一般会計収支計算書

＜一般会計　収入の部＞

科目	金額
会費（過年度分）	192,500
会費（当年度分）	1,368,000
寄附金等	1,715,432
受取利息	37,144
雑収入	33,890
合計	3,346,966

＜一般会計　支出の部＞

科目	金額
慰霊費	215,810
運営費	1,609,355
刊行費	412,160
印刷費	27,115
通信費	90,114
事務所借用費	269,506
振替払込料	27.970
事務用品費	75,865
会議費	91,466
雑費	1,600
退職金勘定繰入	100,000
小計	2.920,961
当期剰余金	426,005
合計	3,346,966

2. 一般会計財産目録

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
現金	11,492	前受会費	640,500
普通預金	655,206	預り金	395.000
定額貯金	1,500,000	小計	1,035,500
振替貯金	14	前期繰越金	705,207
		当期剰余金	426,005
		小計	1,131,212
合計	2,166,712	合計	2,166,712

特別会計収支計算書

1. 収入の部	
前期繰越	1,500,000
2. 支出の部	0
3. 次期繰越	1,500,000
＜内訳＞	
定額貯金	1,500,000

退職金勘定計算書

1. 収入の部	
前期繰越	200,000
一般会計より繰入	100,00,
計	300,000
2. 支出の部	0
3. 次期繰越	300,000
＜内訳＞	
定額貯金	300,000

一般会計第16期予算
（自54. 1. 1　至54. 12. 31）

＜収入の部＞

科目	金額
前期繰越金	1,131,212
会費	1,200,000
寄附金	1,500,000
受取利息	50,000
雑収入	50,000
計	3,931,212

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	120,000
運営費	1,800,000
刊行費	700,000
印刷費	50,000
通信費	150,000
事務所借用費	300,000
振替払込料	50,000
事務用品費	70,000
会議費	100,000
雑費	40,000
予備費	50,000
退職金勘定繰入	100,000
次期繰越金	401,212
計	3,931,212

政府派遣ブラウン環礁戦歿者遺骨調査団に参加報告

会長　浮田信家

一、はじめに

私は幸せにも本年3月に行われた首題調査団の一員に加わるお許を得たので、団長殿はじめ参加皆様の一方ならぬお世話にお縋りしながら終始無事にご一緒させていただき、私なりに目的を達して帰ることができました。

一行は厚生省援護局審査課から団長として厚生事務官土田順次殿、同局業務第二課から団長附として厚生事務官岡本公明殿お二人の外、志賀元一殿、高田源次郎殿、久仏七郎殿、高橋明殿、小松崎照夫殿、藤原潤一郎（日本青年遺骨収集団々長、通訳兼務）殿、橋本広貴（同団々員）殿と、本会々員（江藤高雄殿、新保晃殿、助光正蔵殿、田中猛殿、三浦一郎殿、柳嘉雄殿、山口良二殿と私）の外添乗員として三浦一雄殿を加え18名でした。

海外での戦歿者遺骨収集のご苦労を何回も経験された団長殿の豊富な御経験とお人柄によって終始和気藹々、全員健康裡に経過したこと及び米国側の事情によって本企画成立以来屢次の予定変更に対処し刻々この事を御連絡下さった援護局庶務課の村瀬松雄・高野実両事務官殿の御親切に対し心から御礼を申し上げた上会員各位へこの報告を致したいと思います。

（参考1）

環礁既載の左記々事を参考にしていただければ宜しいかと申し添えます。

号	頁	内容
1	5	ブラウン環礁の戦闘
4	1	太平洋上ブラウンの位置
7	4	ブラウン島の霊砂
10	3～9	ブラウン環礁の戦闘
20	6	ブラウン島従軍記
21	6	〃
29	2	ブラウン環礁収骨予告
30	15	右計画実施の延期の件

特に第10号に掲載した「ブラウン島戦史」は七頁に亘るものなので、再録は致しかねますが、環礁は各号共在庫品が残っているので御希望の方は本部宛御註文下さい。

（参考2）

ブラウン環礁（Brown Atoll）は別名エニウエトク環礁（Eniwetok Atoll）と呼ぶ。かつて日本の委任統治時代から二た通りであったが、その頃日本では主としてブラウン環礁と呼んでいたので以下本稿では「ブラウン」と呼ぶことにした。現在米国では「エニウエトク」を主用するので、厚生省及び報道関係はこれを使用している。

（参考3）

ブラウン環礁の霊砂

既に環礁7号で説明したが、ブラウン島は訪れることが出来ない島なので昭和42年クェゼリン島寄港のとき、ヒーレー司令官に依頼し、ブラウン島から軍用機で空輸してもらったもの、更に今回私が行ったとき採集して来たものもあるので御希望の方は本部に御請求下さればお届けします。

二、行動概要

昭和54年3月8日（木）から、同3月20日（火）までの記録を掲載する。

8日　午後2時厚生省に集合。援護局長殿及び日本遺族会代表から壮行の辞を頂戴し、続いて結団式、団長殿から詳細の行事予定や注意事項の説明があり、午後4時同省からリムジンバスで成田空港に直行、成田プリンスホテルに宿泊。天気晴朗。

9日　午前7時ホテル発。出発手続後、9時成田空港発。午後1時サイパン空港着。乗客、貨物の昇降後サイパン空港発、午後3時グァム空港着。グァム第一ホテルに宿泊。夕食は特に第二次結団式として寛ぐ。

10日　午前10時グァム空港発。11時トラック空港着、コンチネンタルホテルに宿泊。雨多し。

11日　午前7時トラック港出港。乗船はマイクロダウン号（790トン、一九七八年神戸橋本造船所にて竣工、速力10節）。給油のためポナペ港に向う。終日平静。雨多し。

12日　終日平静。時折スコールあり。

13日　午前1時ポナペ埠頭着。繋留中スコール多し。午後1時半ブラウン島に向け出港。午後5時本航海中初めて左30度後方に同航中の貨物船を認む。国籍不明。海上依然平静。

14日　終日航海。昭和42年太平洋各島廻りの時のラリックラタック号、ミリトビ号に較べ雲泥の差。あの時は両船共船内はひどい臭気が芬芬と漂う。坐っていても頭を打つ倉庫内の起居。塵紙さえ皆無となった日日、シャワーどころか洗面さえ出来なかった数日を想い出し、本航海の幸福さをつくづく感じた。

15日　いよいよ待望のブラウン島到着の日、午前3時ブラウン島の灯火を遠距離に認めた。近づくにつれ、島影明らかになったが、やはりマーシャル諸島、ギルバート諸島のいづれの環礁でも見る低い、平坦な長短の島の連鎖であるが、どの島も樹木が無きにひとしい淋しさに不審を感じた。銀色に塗られた数個の燃料タンク、飛行機格納庫、本建築らしい建物が一棟、主に平屋建だが多数点在する。クェゼリン本島の近代化充実さに比し全く比較にならない。

南水道を通過し礁湖に入る。米国々旗々竿の西方2㎞に投錨し、指令を待つ。やがて赤橙色に塗られた小型内火艇が一隻、リチャード・ジェ・バレット陸軍中佐と港務部長の二名が来船、出迎えの挨拶と、上陸時間、上陸員数の指示があった。待機していた土田団長と私と久仏氏と藤原氏の4名乗艇し島北方の上陸桟橋に運ばれた。半壊の建築物、防波堤の壊滅痛ましい中に所々倒れかかった椰子あり。車で二、三分の司令部庁舎に運ばれ、司令官公室でロバート・バッシュピース陸軍大佐に敬意を表した。謹厳温厚な立派な軍人の様相を感じた。司令官はブラウン環礁について次のように説明された。

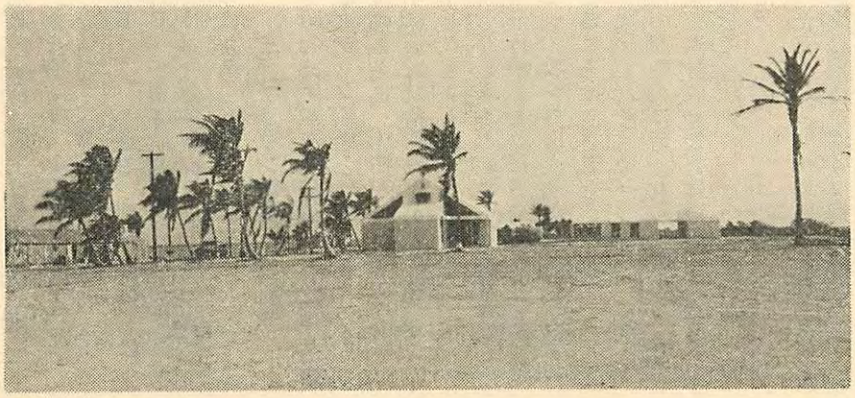
「ブラウン環礁の放射能除去作業は一九七七年から三年計画で行われており、今年は3年目にあたる。作業は予定通り進行しているので、本年9月から現在マーシャル諸島へ強制疎開させられている島民の復帰を迎え、明年4月15日には120人のブラウン島民と米軍との入れ替えを完了する。即ち放射能除去作業の完結である。

このため本島では椰子樹苗の育成、島民のための新住居の建設中である。猶ジャブタン島には、すでに65人の元のブラウン島民が生活しており、リーダーのもとに実験的生活の企画が進められている。

過去二年間に遺骨や遺品が発見されたという報告は聞いていない。明年4月15日以降は、本環礁はサイパン政庁下に入るので、政庁の許可を得れば訪島も可能となろう。

現在使用中の滑走路は最終的には撤去のこととなろうが、当分の間は、事後調査のため、現在の半分以下の規模で残しておくことになろう。セスナ機位は使用できよう。

ブラウン島司令部庁舎


左住宅　右教会

数年前日本の屑鉄回収業者が来島したとき建てたらしい慰霊碑はあったが本年1月5日の台風で跡形もなく姿を消した。また米軍上陸記念碑の前に、自然石の碑があるがこの由来については判明しない。（浮田註・この碑は御影の自然石で「千歳殉職者之碑」と深く刻まれてあった。記録を調べたところ元我国の水上機母艦「千歳」が昭和15年7月トラック島を根拠に海軍大演習地参加の折同艦の水上機が本島附近で事故により墜落、搭乗員2名共殉職した。当時慰霊のためこの碑が建立されたものと思われる。）なお米軍上陸記念碑には19年2月の戦闘経過図と、英文の説明が書いてあり、中に日本人戦歿者七百名と誌されてある。ほぼ

中央左司令官　右バレット中佐

正確の数である）

司令官の説明は右の通りであったが、その後土田団長から司令官に、「今のところ本環礁には戦死者の遺骨、遺留品について、この二年間情報もない由であるが、我々は収骨の希望をもっているので、明年4月15日までに、この種の情報が出て来た場合は、日本政府に通知されるよう」依頼し了承を得た。

なお雑談中に、

○現在米軍駐屯部隊は三軍合せて約一千名。一般勤務員は半年交代の建前だが幹部は一年交代である。

○海水から蒸溜水をとる装置を使用している。但し島民のため建設中の住宅には、天水使用の設備があったので、蒸溜設備は部隊引揚と共になくなるのではないか。

○本島の使用時はクェゼリンと同じくハワイ時間。

○司令官公室は冷房こそあれ、一時しのぎの粗末さであった。

小憩後司令官は我々を米軍上陸記念碑等に案内のあと、バレット中佐に我々の案内を命じ訣れを告げた。好感をもてる指揮官であった。バレット中佐は車で島の礁湖側の島を南端まで走り、ここで下車して、東海岸（外海側）台風災害の大きさを説明された。多くの建物の屋根は吹飛ばされ、椰子の木その他倒れたもの多く相当大きな損害を物語っていた。ここを去り再び車で今来た道を北上し乍ら山積された台風跡の残骸ややがて復帰して来る島民のための住宅、島民にとり欠せない教会、広大な椰子の苗床等30余年の長年月強制疎開をさせた米国が島民に対するせめてもの親心かと温さを感じる一節もあった。

司令官公室に掲げてあった放射能除去作業の進捗表を楽し気に説明されていたが、司令官以下米軍全員が、来年4月15日を指折り数へ待望する気持が察せられた。スーパーマーケット、簡単な映画館、スナック理髪店等はあるとしても酷暑のところで単純なしかも危険な作業の毎日では引揚を待つ心境のつのることも無理からぬと同情した。

先刻迎に来た内火艇で11時帰船した。11時30分船上追悼式、正午抜錨。メリレン島を右に見乍ら北上し、東水道を東航通過のあと更に北上してジベタン島、ルーニット島、ビジリ島を左に見ながら北上をつづけたがエンチャビ島を正横に見る頃は遠距離でもあり、薄暗くカメラもこれをとらえかねた。

本会環礁創立以来どんなにここを訪ねたかったか。それを今日はこの目で見ることが出来、上陸も許された。しかしそこには遺骨も遺品も消息すらしれず、半袖、ズボン、靴ばきの平服で秘密もない、撮影も自由な環礁中の一島を見たに止った。しかし来年4月15日になれば信託統治領下に入る。これを確認し得たことは何よりもの収獲で、その中肉親を迎える望みを得たと厚生省に深謝した。

16日　終日トラック島に向け航行

17日　右に同じ

18日　午前4時トラック島埠頭着。午後2時トラック発。午後3時グァム着。グァム第一ホテル宿泊。

19日　グァム滞在。戦跡見学。

20日　午前3時40分グァム空港発。6時団員全員無事故で東京空港着。団は解散、各自帰宅の途についた。

三、ブラウン環礁と放射能

昭和38・39年頃即ち本会が創立の頃はブラウン環礁というのはクェゼリン環礁と共に、米国が特殊実験を行うために信託統治領政府から長期に亘り租借したところで、両環礁一帯は黒い霧に包まれており、たとえ塔乗中の船舶や飛行機がここに寄港することがあっても、我々外国人は当然船外、機外に出ることは許されないと厳重に知らされていた。それ故マーシャル諸島中、他の環礁では行えた現状調査や慰霊祭、遺骨収集などはこの両環礁では希望しても叶えられないと諦らめていた。

ただクェゼリン環礁だけは、慰霊碑建立の期待があり又同地に勤務の二世の方々との交際が発展し、ついで同島米軍司令官との文通がはじまった。

その中クェゼリン、ミサイル、レンヂ（Kwajalein Missile Range）という部隊名ともなり、日本の新聞にも「この島から約六千七百キロ離れた米国西岸のバンデンバーク空軍基地から打上げるミサイルをクェゼリンのレーダーで捕捉し、更にクェゼリンから打上げるアンティミサイルでブラウン島に誘導するのだ」と知らされていた。

従って昭和52年12月31日のNHK朝のニュースで政府主催でブラウン環礁の遺骨収集を行うという報道を聞いたときは夢ではないかと喜びかつ驚いた。早速厚生省に訊したところ、この時迄に同省が知り得た資料は

「昭和52年2月既に米国ではブラウン環礁の撤収が決定され、環礁内の残滓の除去、清掃につき、日米の請負業者の入札が行われた由であった。結局米国の業者がこの仕事をひきうけることになったが、厚生省は日本の業者から状況をきき、そのとき本会が拝借した写真は環礁29号で紹介した。米国業者は52年一ぱいで清掃を完了した筈であった。従って遺骨収集は可能だし、これを53年度中に行うため予算の要求をされると共に米国に対し、遺骨収集の了解を求めて下さったらしい。

そして53年3月と4月の日本遺族通信には53年度に国の予算でブラウン環礁の遺骨収集を発表されたので、本会としてもなし得る限りの協力をするよ

う、

1　ブラウン環礁中埋葬場所の資料

2　マジュロからブラウン環礁に渡る船舶の調査

3　厚生省への協力

等の準備にかかった。

つづいて厚生省は5月の日本遺族通信で、本年度ブラウン島の遺骨収集につき、

①実施予定期日　9月中旬

②参加予定人員　20人

と発表された。厚生省は外交ルートを通し、更に努力された。この回答を待つ中に8月は過ぎた。

既に放射能除去は完了したと思っていたビキニ島民の再疎開ということをこの頃耳にした。

九月に入り米国は日米独の報道機関に対しブラウン環礁の放射能除去作業の現状を公開した。この報告は読売、朝日、毎日等から相当紙面を割いて報導され週刊誌にも掲載された。（内容は次の項に記載）

この頃厚生省では遺骨収集は10月13日成田発マジュロからブラウン島を船で往復して、11月2日帰着との一案をたてられた。米国よりの回示がおそいのと、船便の顧慮からであった。

厚生省は20人をブラウンに送りこむ方法について苦慮された。飛行機を使用することは許されなかったので、やっと考えられたのがマジュロから船をチャーターして往復することであった。

9月19日村瀬事務官から

「米国政府から回答があったがブラウン環礁は現在放射能除去の作業中である。日本政府から要請の宿舎の提供は出来ない。飛行機の便宜は与えられない。エンチャビ島入島はできない。ブラウン島に日本軍人の墓はない」

という回答のようであった。

10月17日附庶務課長から10月の実施が不可能となったのでしばらく延期するとのことであった。

いろいろの事情があって昭和53年3月末までに実施したかったのでこのあとも厚生省は外交ルートを通じ不断の交渉を続けて下さった。

ブラウン環礁の放射能汚染

9月10日前後のニュース、新聞等によれば私は単にミサイルの実験とばかり想像していたのに、これらミサイルの中には多くの核搭載のものがあり、核の実験は既に昭和23年以来行われていたことであり、昭和33年までに43回（内3回は水爆）もの核実験が行われていたとのことであった。

ビキニ島の核実験を行った場合は、日本漁船の被害等もあったので、よく知られていたが、その実験が23回であったというのに、ビキニ島に倍する実験がブラウン環礁に行われていたことは全く知らなかった。ブラウン環礁中実験の目標とされたのは主として北東地域即ちルーニット島（実験18回）、エンチャビ島（実験10回）、ビジレ島（実験？回）その他を合せ計43回に及んだ。

このためこの環礁で出来る椰子やパンの実又魚類など食料に供することは堅く禁ぜられており、当然のこと乍ら島民の食糧は当分の間輸入乃至は移入によらなければならない。米国は島民が復帰する前に放射能の除去を完了しなくてはならず、ブラウン環礁はこの作業に明け暮れしていた。

○　放射能除去作業

ブラウン環礁の場合この作業は、放射能で汚染された砂を生コンクリートと混ぜて、これを地下に埋め、その上に厚いコンクリートの蓋をするという作業である。9月10日前後発行された新聞、週刊誌と、昨年10月読売新聞本社の黒崎精三記者（昨年9月招かれてブラウン島の公開に参加の方）をお訪ねし伺ったお話をまとめて見た。

核実験43回のうち18回もの実験を見舞われたルーニット島は、早期に除去作業が行われ既に完了したので、この島に各島の汚染土を集めその除去作業を行っている。この島には核実験で抉（えぐ）られた大穴（クレーター）（直径120米・深さ10米）が2ツあり大きな池になっているがその中の一ツ（昭和33年5月5日に行われた「カクタス」（18キロトン）の穴に流し込んでいる。

他の島の作業は放射能感知車で捜索し、汚染土を発見するとブルトーザで地表から15センチ位まで容赦なくはぎとり、上陸用舟艇にダンプカー共積み込みルーニット島に搬ぶ。ルーニット島には頭から宇宙服と見間違う防毒マスクをかぶり、全身を黄色の防塵服で、この汚染土と生コンクリートを混ぜて前記大穴に流し込む。この作業の毎日とのことである。

四、むすび

ここで玉砕した部隊の大部が厳寒の北満で編制され、その地を出発後旬日ならずして東支那海、太平洋の怒濤にもまれ、やっとこの島につくや二カ月ならずして玉砕をとげ、しかも玉砕の公報もなく淋しく散華されたこと痛ましく、如何なる努力を重ねてもと、厚生省にお願いしていたが、厚生省も異常のご苦労の結果成果を見た。出発直前にブラウンに渡る乗船について問題が起きたが当時マーシャルに只一隻、数日間の工面のつくのを無理に無理をしてチャーターし我々をお連れいただいた。たまたま昨年竣工したばかりという新造船故このチャーターにどれほど多額の費用を要したか測りしれない。

かくて団員一同多大の収穫を得て帰還した。明年4月15日の島民復帰を期し我々は肉親のお迎えを実現したい。これには厚生省のお力によるの外ない。このため微力ではあるが会をあげて協力申し上げ、遺骨収集の目的を実現させていただきたく念頭してやまない次第である。

政府派遣慰霊巡拝団
ギルバート班　に参加して

青森県　塚原ハナ

この度、厚生省主催の慰霊巡拝団に加えて頂きまして誠にありがとう御座いました。

十一月十二日成田空港集合。仲よしの方が私とも四名も居りまして嬉し涙がこぼれました。翌十三日午前九時に成田空港を発ち、午後一時サイパンに着きました。

サイパン島で、アガナ総領事御出席のもとに盛大な追悼式を挙行致しました。

戦跡めぐりは悲しい物語りで、戦争は絶対避けるべきだと思いました。

グァムでマーシャル班と分れて、一行十九名ナウルで乗継ぎいよいよ十五日目的のタラワに着きました。

ホテルは内装も新しくテーブルも丸く、ナプキンも色々の形に折りたたまれて居り、御馳走もなんとなく上等に見えます。知った顔も見えまして再会を喜び合いましたが相変らずのハダシが気にかかります。内海の小屋は衛生上取除かれたそうです。

タラワの島は椰子の木も青々として緑したたる島、スコールで美しい虹の橋のかかる島と伺いましたが、只今は乾期との事、椰子の木も黄色く色づき枯葉もつき、下草もすっかり茶色に枯れてスコールもないが、灼けつくような暑さでした。太田様があの島へ行くなら水だ水だとおっしゃった言葉が一しほ身に泌みて思い出され、英霊が哀れで涙が流れます。

十七日はベシオ島の慰霊公園で追悼式を行いました。

思い思いに遠く故国から持ち寄った品々をお供へ致しまして、慰霊の詞は、逞しく成長致しました遺児の方が述べましたが涙でとぎれがちでした。英霊も椰子の葉蔭でさぞ喜んで聞いて居りました事でしょう。

式後、日本に持帰るお骨を、男の方達が何時間も暑い中を見守って茶毗に付し、最後の船でホテルにお帰りでした。幸せのお骨はどなたでしょう。

私達はバスで戦跡めぐりを致しました。激戦のあった浜辺では長尾さんがお線香を立て、これもお兄ちゃんが好きだった。これも好きだったと、この柿はお父さんが作ったとお供へ致しまして、私達も一緒に拝んで、又新に涙を流し、灼けつくような白い砂の浜辺で汗と涙を流しながら貝を拾いました。

十八日は海上慰霊祭の日でしたが、私は体の調子が悪く残念ながら一日休みました。

翌十九日はいよいよ待望のマキン行きです。妻五人、遺児五人、御兄弟の方六人、厚生省の方お二人、添乗員さんと一行十九人が二班に分れ、十五人乗りの小型機で人も荷物も目方を量って乗りました。空からはタラワ環礁も美しく良く分りました。着きましたら小型機は二班を迎へにすぐ戻りました。マキンは一層ひなびて未開の感じです。水たまりも多く、タロ芋があちこちに植えてあります。

小型トラックに乗せられ、ガタガタと音を立て、休憩所に連れて行って下さいました。そこは水道もあり、お手洗いもあり安心致しました。テーブルもあり椅子は五つしかありませんでしたが、ベッドを持出して来て私達を掛けさせて下さいました。

着いた頃雨が降り出し、空も鉛色に曇り風も吹いて二班の安否がきづかわれましたが無事着き安心致しました。

その頃は雨も小降りになりまして、いよいよ慰霊祭です。船の残骸の見える湾のような処で浜木綿の根元に日の丸の旗を掛けまして祭壇を作り、持参した品々をお供へし、お線香とろうそくを沢山立てて、淋しかったであろう英霊達どうぞ安らかにお眠り下さいと心からお参り致しました。

この島にも船や飛行機の残骸が赤さびて残って居ります。でも雨が多いと見えまして下草も椰子の木も青々として、そこに会長さんより頂きました写真と同じ浜木綿の花を見つけまして嬉しくなりました。井戸もありまして綺麗な水が湧いて居りました。

帰途二階家の側の集会所に私達を休ませ、長老の方が私達の来る事をラジオで知った。良く来て下さった。と歓迎して椰子のジュースを御馳走して下さいました。

残りました二班の方に、昔日本の軍隊に使われたという五十二歳の女の方が見えて色々と想出話を語って下さいましたとの事です。

マキンの慰霊も無事に済み、二十日十三時半タラワに名残りを惜しみつつ機上の人となり、ナウルで一泊、翌朝月を真上に見て五時四十分発。ポナペ島に二十分休憩して、グァムに到着。夕方マーシャル班と落合いまして、お互い黒い顔をして無事を喜び合いました。二十二日九時グァムを発ちました。雲の上から富士山が見え、無事七千キロの慰霊の旅も皆様方に助けられて終りました事を感謝致して居ります内に成田に着きました。

成田では解団式を行い、又荷物を手伝って頂きまして、娘に成田迄迎えられ無事十八時半帰宅致しました。

この度ギルバートに行かれました事は皆様方のお蔭と感謝致しつつ満足致して居ります。期待していた、みたまたちの渡ったであろう、虹の橋を見る事が出来なかったのが唯一つ残念でございました。

ルオットとマロエラップと（一）

―二五二空の戦闘を中心として―

平林和夫

㈠　はじめに――戦後史は今も

戦後三十有余年、既にずい分遠のいた昔の筈であるのに、昨年は、私にとってとくにルオットとマロエラップという島が、「戦後史は今も」尚生き続いていることを、あらためてつよく身に覚えさせられる年であった。

一つは昨年暮の十二月十四日、日本テレビの「木曜スペシャル」に於て、「緊急特報!!南の島にゼロ戦一五機発見、孤島の守備隊の数奇な運命の記録」として、「第三の敵〝飢え〟と闘った捨て子部隊、第二五二海軍航空隊ゼロ戦パイロットの行方」が放映されたことである。

私も日本テレビのこの取材に出来る限りの協力をさせてもらったので、放映当日は息をつめて、この番組に見入ったのであるが、ジャングル化したその島に、ほんとに自分が出かけたような感じになり、往時のことがまざまざと思い出されて、数日の間感動の波おさまることがなかったのである。

もちろん私共実際にその島に、苦悩の戦いを丸二年間も過した者からすれば、必ずしも満足すべきものではなかったが、しかし民間放送としては近頃まれな良心的精力的な取組であったものと感謝している、その夜番組のまだ終らないうちから二カ月の今日まで、沢山の電話や手紙が全国から相次ぎ、感動の激励と消息照会が行われ、その反響がいかに生ま生ましいものがあったかを示している。

そして二つは、この年政府主催の「中部太平洋地域戦跡慰霊巡拝の実施について」マーシャル諸島A班が「クェゼリン・ウオッゼ・マロエラップ」を実施区域として行われたことであった。私も得難い機会と、大急ぎで参加申込の手続をとったのであるが、残念ながら復員者代表は、福島県の方に決定された。出発直前に無理な願いとは思ったが、電話で連絡をとり、私共の分も十分お参り頂いて、出来れば同島の砂をお持帰り頂くようお願いしたのであった。

やがてくわしい便りと共に同島の写真・砂・さんごが送られて来た。私はその霊砂とさんごの片を、特別関係あつい青森県などの遺族の方にお届けし、写真と便りも回覧に付したのであるが、その写真は、マロエラップのありし日を偲ばせる、又とない貴重な資料であって、回覧のあとアルバム「戦後史」に収めてゆくつもりである。

年を越して昭和五十四年になると、俄然マロエラップ島に、是非共、私共戦友自らの手で、慰霊参拝に行こうではないか、ということになり、業者の積極的な協力もあって、今同志を募集する運びとまでなったのである。

正に「戦後史は今も」生き続けているのだ。

私はこれを機縁として、日頃何かと御指導御協力を頂いている、マーシャル方面遺族会の会長浮田信家様はじめ会の方に対し、ルオットとマロエラップ島のことを、私共の二五二空の戦闘を中心に、ありのままに、御報告申し上げ、あらためて数多くの戦友の英霊に心からの祈りを捧げたいと思うのである。

㈡　二五二空――ラバウルからルオットへ

私が海軍軍籍に入ったのは昭和十七年九月、二年現役主計科見習尉官補修学生として、海軍経理学校に入校をした時であった。そして、十八年一月に卒業し、私共三名の新任者が、はるばると赤道を越えて、ラバウルに着いて、二五二空本部に着任した日、二五二空は英霊の内地帰還に当って、告別の式をしている最中であった。

すでに二五二空はマーシャルに転出の令を受けていたのである。

二五二空というのは、二百五十二という数字ではなくて、二・五・二という数号なのである。その名の数号の示す通り、戦闘機隊（二）で佐世保鎮守府所管（五）の特設航空隊（二）であった。

戦闘機は今尚有名なゼロ戦であった。私共が大学を繰上げ卒業した同じ時期の十七年九月、わが二五二空は館山基地で開隊、十一月ラバウルに進出していたものであった。

当時の一般の戦況は、まだまだわが方が南方全域を海空共に制していた。ラバウルは大軍事都市であり海陸軍人が山上から平地から海上にかけて、満ち充ちていた。山上の本部から湾を見下すと、巡洋艦以下の艦艇輸送船の大小が、約六十隻もいたし、敵襲は夜間偵察が時折来る程度であって、若い私共は意気天を衝く思いで、毎日元気にみちて服務していた。司令は海軍中佐柳村義種（のち戦死少将）副長は舟木忠夫少佐（のち戦死大佐）主計長は岸田自成主計少佐（のち主計中佐）であった。

私共はそうしたうちに、転出の準備もそこそこに、マーシャル方面に転出をみることになって、輸送船に分乗して翌十八年二月下旬パラオ・タロアを経て、三月三日新しい基地ルオットについたのである。（以下次号）

（元二五二空主計長、海軍主計大尉
現京都府久美浜小学校長、54・2・20記）

寄付者芳名

（四一三名）

本欄に掲載の会員各位は、年度会費御完納の上の御寄付であり本会運営上寄与するところ多く役職員一同いつも感謝申し上げているところであります。特に近年の公共料金の上昇、これに伴い諸物価の上昇によって本会の会費は昨53年から年額二千円となりました。本部では一層節約を旨とし本務遂行に事欠かぬよう留意いたしますので今後共御協力いただき度御礼と共に御願い申し上げます。

（昭和53年11月1日から昭和54年5月31日までに入金の分）

寄付額　芳名（敬称略）

篤志会員その他

一〇〇〇〇　鈴木　寅雄殿
〃　星川　武殿
八〇〇〇　嘉村　栄殿
六〇〇〇　高田源次郎殿
五〇〇〇　矢崎　寧之殿
〃　莧　腸　会殿
三〇〇〇　井上　義夫殿
〃　江藤　圭一殿
〃　ナウル四高会殿
〃　金子　英郎殿
〃　島根　宏明殿
〃　土屋　太郎殿
〃　匿　名殿
〃　十二　徳次殿
〃　松丸　知行殿
二五〇〇　小林　重雄殿
〃　長谷川　博殿
二〇〇〇　木下　甫殿
〃　高野　庄平殿
〃　中島新之丞殿
〃　福田　呉子殿
〃　松平　永芳殿
〃　珊　瑚　会殿
一〇〇〇　進藤　進殿

訂正　前回寄付者芳名中、中島剛は中島新之丞の誤りです。謹んで訂正いたします。

◇北海道

二〇〇〇〇　兄　助光　正蔵
三〇〇〇　母　金子　きよ
〃　父　北村弥三郎
〃　妻　白山　光枝
〃　父　西村　保
二〇〇〇　妻　田村　ヨシ
一〇〇〇　長女　伊藤　フジ
〃　妻　尾崎　キエ
〃　妹　小山キミ子
〃　妹　鈴木　久子
〃　姉　瀬法司フサヨ
〃　弟　中井　幸夫
〃　父　沼山長一郎
〃　母　細川　きく

◇青森県

六〇〇〇　妻　工藤　ハナ
五〇〇〇　母　渋木　フミ
三〇〇〇　兄　荒谷美佐男
二〇〇〇　妻　塚原　ハナ
〃　姉　伝福　ちゑ
一〇〇〇　妻　本堂　テフ
〃　妻　雫石　ハツ
〃　母　田中　ロク
〃　妻　高杉　トミ

◇岩手県

三〇〇〇　妻　千田　徳義
二〇〇〇　妻　中山　リヨ
一〇〇〇　妻　菅原　キイ
三〇〇〇　妻　平形いせこ
二〇〇〇　妻　松木　孝子
〃　妻　渡辺　雪子
二〇〇〇　兄　卯花要一郎

◇秋田県

一六〇〇　妻　小室舜司郎
三〇〇〇　妻　奥山　キノ
〃　母　熊谷サタヨ
二〇〇〇　姉　佐藤　敏子
一〇〇〇　妻　小前　ミヤ
〃　兄　関山富一郎
〃　妻　畠山　タカ

◇山形県

三〇〇〇　母　青野はつよ
〃　妻　大泉　時子
〃　妻　大場美津子
〃　妻　渡辺　ミノ
一〇〇〇　妻　赤塚　美正
〃　妻　丹野　アサ
〃　弟　森谷　利雄

◇福島県

八〇〇〇　兄　三浦　一郎
三〇〇〇　妻　石橋　節子
二〇〇〇　姉　富田　ミツ
一〇〇〇　父　馬上　嶺雄
〃　父　長谷川　潔

◇茨城県

八〇〇〇　母　大熊　もと
三〇〇〇　妻　若狭あさ子
一〇〇〇　母　宮内　はつ

◇栃木県

一〇〇〇　弟　菊地　彦亘
三〇〇〇　母　増渕カオル
一〇〇〇　妻　猪瀬　ナカ
〃　母　神山　サク
〃　母　木村恒三郎
〃　兄　田名網武夫

◇群馬県

三〇〇〇　兄　園部　重太
一〇〇〇　母　森　ゆき江
〃　母　林　春千代
〃　弟　昼間　楽平
〃　匿　名
〃　匿　名
〃　土岐　達夫
一〇〇〇　弟　土岐　達夫
〃　母　林　春千代
〃　弟　昼間　楽平
〃　母　水野　はな
〃　母　柳　嘉男
〃　妻　木村　久子
八〇〇〇　母　小林　ミツ
〃　弟　橋口　昭利
〃　弟　三ツ木正次
六〇〇〇　弟　田中　猛
五〇〇〇　妻　岩浪きよ子
〃　妻　佐藤　宗丞
〃　弟　浄永　孝
〃　妻　土方　フジ
〃　母　番場　マサ
〃　父　樋谷　弁治
〃　妻　間々田やす
四〇〇〇　母　吉田やよい
〃　長女　荒木　常子
〃　妻　佃　喜美
三〇〇〇　兄　出口　スエ
〃　甥　飯島浩一老
〃　妹　木村　史朗
〃　兄　小池　勇二
〃　妹　山口　裕子
〃　妻　斉藤　幸江
〃　弟　菅沼　昇
〃　長女　菅谷喜代子
〃　母　助川与富子
〃　兄　内海　軍三
〃　中村喜久代
〃　中村みさを
〃　姉　緑川　マキ
〃　妻　六軒つる子
二〇〇〇　妻　伊藤ますの
〃　母　石田　トシ
〃　母　小泉　タケ
〃　兄　小島　章
〃　兄　斉藤耕太郎

◇宮城県

◇埼玉県

◇千葉県

一〇〇〇〇　妻　津久井艶子
八〇〇〇　妻　毛利　しげ
六〇〇〇　長男　桜井　正一
五五〇〇　妻　星野千重子
三〇〇〇　母　倉田　イワ
〃　妻　杉　冨貴
〃　姉　野沢　菊枝
〃　妻　芳賀タツエ
〃　妻　広原　チヨ
二〇〇〇　妹　石川　きみ
〃　妻　大森　すず
〃　妻　長沢　その
〃　妻　谷沢　英子
一〇〇〇　妻　川間　つね
〃　次男　佐藤　輝雄
〃　中山　正

◇東京都

二〇〇〇〇　妻　黒川　誠
〃　妻　小泉　文江
一〇〇〇〇　妻　荒井　福栄
〃　兄　浮田　信家
〃　弟　大高　吉郎
〃　妻　佐竹　エス
〃　長男　井上　賀雄
〃　妻　国松ふみ江
〃　高橋　鎮夫

二〇〇〇	妻	鈴木つな
〃	甥	萩原勇一郎
一〇〇〇	母	伊藤ハナ
〃	兄	荻島佐吉
〃	妻	小野リエ
〃	母	鈴木はつ
〃	弟	竹本正平
〃		鳥居みさを
〃		長久保キン
〃	父	長谷川寛
〃	妻	原富子
〃	兄	松井直一
〃	母	増山キミ
〃	兄	森田幸吉
〃	母	吉田セイ
◇神奈川県		
一〇〇〇〇	弟	片山計
〃	妻	佐藤登志
八〇〇〇	兄	嶋田正彦
〃	妹	吉松貞子
六〇〇〇		大石豊子
五〇〇〇	兄	大槻惣一郎
〃		佐藤貞子
〃	兄	谷達也
〃	母	柳リン
〃	姉	沖立キヨ
三〇〇〇	妹	熊沢静子
〃	従兄弟	渋谷良雄
〃	弟	佐藤鉄太郎
〃	妻	三村ともよ
〃	娘	川名しげ子
二〇〇〇	妻	伊沢ヤス
一〇〇〇		貴島為夫
〃	兄	岩瀬石松
〃	母	斉藤リウ
〃	妻	田中トメノ
〃	母	千野ますこ
〃	妻	露木千鶴
◇新潟県		
一〇〇〇〇	妻	渋谷セキノ
〃	妻	高林セキ
一〇〇〇〇	妻	藤田ヨリ
五〇〇〇〇	兄	青木謹次
三〇〇〇〇	妻	高橋梅子
二〇〇〇〇	妻	松岡イキ
一〇〇〇〇	母	石丸ユシ
	兄	河崎通宣
	兄	小林正道
	母	後藤キヨ
	妻	佐藤フジ
		坂井繁男
◇富山県		
五〇〇〇	妻	本多喜久江
三〇〇〇	長女	村梶光栄
		棚橋昭二
〃	母	寺島きよ
二〇〇〇	妻	竹林房江
一〇〇〇	長女	池田淑子
〃	母	矢野シゲ
〃		小林好子
◇石川県		
六〇〇〇	兄	林庄三
五〇〇〇	妻	土屋トミエ
三〇〇〇	妻	寺島ときわ
〃	妻	三輪つげ
一〇〇〇	姉	高島芙容
〃	長男	永井武弘
〃	妹	吉光澄子
〃	妻	宮丸富美
◇福井県		
六〇〇〇	妻	青木みねを
三〇〇〇	妻	鳥羽春枝
二〇〇〇	妹	宮崎満枝
一〇〇〇	妻	梅田清子
		柳沢清信
◇山梨県		
三〇〇〇	妻	望月とよ子
一〇〇〇	兄	三井精義
◇長野県		
五〇〇〇	母	田中ゆきの
〃	妻	高見沢およう
三〇〇〇	父	小林類之助
三〇〇〇	妻	堀内美江
二〇〇〇	妻	滝沢牧江
一五〇〇	妹	中山光子
一〇〇〇	母	伊藤ひさゑ
	妻	岡島みね子
	兄	宮入貞夫
◇岐阜県		
三〇〇〇	妻	島本みさを
〃	妻	吉田綾
二〇〇〇	兄	渡辺三三
一〇〇〇	母	寺沢喜美代
◇静岡県		
一〇〇〇	姪	平野良子
五〇〇〇	甥	江藤高雄
〃	妻	土屋まさ子
〃	母	米倉ぬい
四〇〇〇	妻	服部くにゑ
三〇〇〇		高橋かつ江
〃	妻	山田登世
二〇〇〇	父	赤堀弥三郎
〃	弟	遠藤清己
一〇〇〇	妻	飯田たつ子
〃	妻	大塚かね
〃	父	畑良平
五〇〇	妻	北野ちとせ
◇愛知県		
八〇〇〇	妻	川越コウ
五〇〇〇	妻	山田あき
二〇〇〇		安藤昌子
〃	兄	川村正一
〃	兄	山本彦右衛門
〃	女	吉田ひさ子
一〇〇〇	母	大原はる
◇三重県		
二〇〇〇	妻	近沢あき
一〇〇〇	妹	荒木すへ
◇京都府		
五八〇〇	弟	川本彦次
八〇〇〇	弟	中川修
三〇〇〇	妻	稲積や江
〃	母	小林サト
二〇〇〇	妻	中根杉子
〃	妻	村上増枝
一〇〇〇	母	柴田さく
〃		谷正文
〃	妻	八木きよ
〃	妻	安威千鶴
◇大阪府		
三〇〇〇〇	妻	原田ヒロ
一〇〇〇〇	妻	堀塚かつ江
六〇〇〇	父	栗巣弥一郎
◇兵庫県		
一〇〇〇	父	瀬川英治
五〇〇〇	弟	枝光剛郎
〃	母	清水つちゑ
四〇〇〇	妻	友枝カオリ
三〇〇〇	母	林いち
一〇〇〇	妻	山野イクエ
◇和歌山県		
二〇〇〇	妻	山中フジ
◇鳥取県		
二〇〇〇	妹	杉川及江
◇島根県		
四〇〇〇	妻	園山和子
一〇〇〇	母	伊瀬ナヲ
〃	妻	松下綾子
◇岡山県		
三〇〇〇	妻	宇山アサ
〃	姉	金子ミサヲ
◇広島県		
一〇〇〇〇	妻	浦手ハル
三〇〇〇	妻	江坂富子
〃	母	藤本カメヨ
二〇〇〇	兄	石田史郎
〃	妻	田口マサヨ
〃	妻	原シズエ
〃	妻	松本タカミ
〃	妻	荒谷ミキエ
一〇〇〇	妻	川西シズコ
〃	妻	久保サクノ
〃	妻	小林アヤ子
〃	妻	寺内ヤチヨ
一〇〇〇	父	浜本米一
◇山口県		
一三〇〇〇	妻	内富みつゑ
五〇〇〇	妻	坂本ヤスエ
二〇〇〇	妻	嶋田チヨ
〃	母	矢次富
一〇〇〇	妻	下村チエコ
〃	妻	首源ヒサ
〃	妻	福谷幸子
◇徳島県		
一〇〇〇	妻	坂本栞
◇香川県		
一〇〇〇〇	長男	秋山正清
〃	母	奥田マス
〃	母	田中ヤスエ
三〇〇〇	次男	石川正興
〃	妻	石田藤美
〃	妻	富田トシ子
一〇〇〇	妻	松原ユキエ
◇愛媛県		
一〇〇〇〇	妻	清水朝美
八〇〇〇	母	三好勝子
六〇〇〇	母	松木ミチル
二〇〇〇	妻	伊藤梅子
〃	父	長岡楽三
一〇〇〇	母	友枝都
〃	母	伊原トノヨ
〃	妻	久保田泰子
〃	母	宅見クマ
〃	妻	小西アキヨ
〃		森田静子
〃	姉	山本峯子
五〇〇	兄	渡辺義雄
◇高知県		
二〇〇〇	妻	近森幸恵
一〇〇〇	妻	田中百合
〃	母	野島豊
〃	父	馬場福義
一〇〇〇〇	母	家迫ソヲ
〃	妻	広田ヨシ子

八〇〇〇　弟　西原　康雄
六〇〇〇　母　江崎　ヒモ
〃　妻　太田　菊江
四〇〇〇　母　倉員ミカノ
〃　兄　樗木孝二郎
三〇〇〇　妻　岩橋シマエ
〃　父　鐘ケ江　弘
〃　妻　下釜　春江
〃　父　杉山　柳平
〃　母　徳王　好子
二〇〇〇　母　緒方ミサヲ
〃　妻　近藤シヅエ
一〇〇〇　〃　岩崎　進
〃　妻　甲斐　光子
〃　母　倉智　トモ
〃　妻　柴田ヤエ子
〃　弟　花田　哲二
〃　妻　泰　サカエ

◇佐賀県

二〇〇〇〇　母　金子庄之助
一〇〇〇〇　母　宮崎　トモ
八〇〇〇　妻　井手ツギヨ
五〇〇〇　妻　原口　ミヤ
三〇〇〇　妻　石田　トシ
一〇〇〇　母　金子　セノ
〃　母　坂本　トセ
〃　兄　牛島　辰巳
〃　妻　宮崎　ツヨ

◇長崎県

五〇〇〇　妻　安達シツヨ
〃　妻　松尾　フサ
〃　妻　前田　フサ
三〇〇〇　妻　林　文枝
二〇〇〇　妻　平田　利子
〃　妻　福田　音和
一〇〇〇　父　板浦弥一郎
〃　母　山口　トモ

◇熊本県

三〇〇〇　妹　武田　タカ
二〇〇〇　妻　塚野ヨシ子
二〇〇〇　父　松野　文治
一〇〇〇　妻　内田オサエ
〃　妻　大宮　誠子
〃　母　鹿島　サク
〃　兄　北村　権蔵
〃　長男　小山　幸治
〃　妻　田中ミチエ
〃　妹　村上佳寿子
〃　山部シゲモ

◇大分県

一〇〇〇〇　妹　野田　雅子
一〇〇〇　兄　衛藤　金喜

◇宮崎県

六〇〇〇　父　稲留　通秋
三〇〇〇　妻　池田　トミ
〃　妻　児玉　チン
〃　母　山口マサ子
二〇〇〇　母　杉田ヨシノ
〃　弟　高橋　重美
一〇〇〇　妻　園田エイ子
〃　妻　山口　ミワ

◇鹿児島県

五〇〇〇　妹　山田フヂエ
四〇〇〇　妻　野平　ヨネ
〃　妻　村上　ノキ
三〇〇〇　長男　和田　芳久
二〇〇〇　弟　出花　利文
〃　妻　川畑ツルエ
〃　妻　徳重ミツ子
〃　弟　中原　義臣
〃　妻　森　テル子
一〇〇〇　妻　黒岩キミエ
〃　妻　染川トメヨ
〃　母　中村ケサヂヨ
〃　長男　原田　惟行
〃　妻　吉永ハルミ

◇沖縄県

一〇〇〇〇　妻　石原　キク
三〇〇〇　甥　宮城　勇
〃　妻　宮城　幸子

事務局だより

○　今年の慰霊祭は、例年のように、二月六日に靖国神社で厳粛に行われました。本部役員一同は、一度来た方が又来てほしい。新らしい方が沢山来てほしいと念じ乍ら総会の前に入念な打合せや準備作業をして皆様をお待ちしておりました。

会の済んだ後に、手落ちはなかったか、御不満はなかったかと反省会を開いて、来年に備えております。慰霊祭や総会、直会旅行などについて御気附の点がありましたら何なりとお聞かせ下さい。

今年来た方は来年も亦お元気なお姿をお見せ下さい。お知り合いをお誘い下さいましたら尚結構です。

○　この〃環礁〃をより一層皆様の身近かなものにするため、一人でも多くの会員のお便りを載せたいと思います。はがきで結構ですから、お気軽にお便り下さい。

「なつかしい思い出」「苦しかったこと」「楽しかったこと」「御家族のこと」「これからしたいこと」その他何でも結構です。

戦死者の氏名と続柄、戦死の場所もお書き下さい。

○　戦地からのお便りやスケッチ、日記などで〃環礁〃にのせてもよいものをお持ちでしたら、お貸し下さい。通常の原稿やお便りはお返ししておりませんが、戦死者の書かれたものはお返しいたします。

○　採用するしないの決定と、編集の都合による多少の手直しは編集委員に予め御任せいただきます。

○　〃環礁〃を読んでいる方は約一千六百人ですが、慰霊祭においでになれるのは毎年二百人前後です。慰霊祭においでになれない方のためにこの〃環礁〃は何より貴重なものですから、一層努力して、親しみ易く、読み易いものにしたいと思います。

記事や編集などについての御意見御批判をお聞かせ下さい。

○　昨年十二月十二日、浮田会長が、財団法人日本遺族会の相談役に就任されました。

同時に就任されたのは、吉田元久様（陸軍）と稲葉　征様（海軍）のお二人です。

本　部
郵便番号　一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話（東京）四三四―四三〇〇番